



漫 録

す ぐ み 臺



十 八 公

から梅雨に續いて、六十何年ぶりとか言ふ暑さが、追ひかけるやうにやつて來た今年の夏、これから先まだく、水銀柱は上昇するだらうと嬉しくもない豫想を、氣象臺から發表してゐる今日此の頃、あまり固苦しい事ばかり言つたり聞いたりしてゐたら、暑さの折柄一層茹るだらうと、涼み臺での話題にもなり兼ねるやうな、とりとめのない事を並べて見る。

◇ ◇ ◇
暑くなると、いつも暑さの表現の一つとして、アスファ

ルトが、流れ出しさうだと言ふ。まったく流れ出しさうでなくて、車道の舗装アスファルトが、歩道際の側溝へ、路盤からセリ出されたり、溶岩のやうに押し流されたやうに層をなして流れ出てゐる所を、所々で見受ける。が、近頃は施工方法が良くなつたか、一時取沙汰されたやうに、靴を取られたとか、下駄が抜けなくなつたなんて事は、無くなつたやうだ。アスファルト舗装の道路は、たしかに足觸りが良い。夏の盛りでも寒い時のやうな硬度のままで、ゐてくれると大變都合が良いのだが、我國のやうに寒暑共に

相當の所まで行く氣候の土地柄では、夏向、冬向と二様の舗装が季節毎にとりかえられない以上、溶けたり、固くなり過ぎたりするは止むを得ないのだらう。月が射し込めば雨が漏るの類である。寢たまゝで月見が出来て、しかも雨が漏らないやうな方法を考えて欲しい。

アスファルト舗装でもう一つ。

此れ等は色の關係からであるが、アスファルト舗装の町並みは、夜分大變に暗く見える。自動車のヘッドライトの光度も、路面のアスファルトの黒に吸収されて、反射光力は全然無いと言つて良い、だから、運轉手の視野も非常に短縮されて、運轉上の疲勞が倍加するさうだ。これは光熱の不經濟ばかりでなく、人間のエネルギーも不經濟なわけである。あの光りの吸収を少くするために、アスファルトの漂白（？）が出来ないものか。これは純白にされて、さして晝間キラ／＼反射されて、眩しくされたら、何にもならないが、せめて褐色か黄色ぐらゐに色が變えられたら大變良いだらうと思ふ。先日茶飲み話に、其の道の人に聞いて

見たら、「その方法が発見されたら大發明として世界に貢献するところも尠くないでせう」との話だつた。誰か研究して呉れる人は無いか知ら。贅澤な、虫の良い注文かも知れないが、カメレオンのやうに、晝間黒くて、夜間白くなるやうにして貰えたら此の上は無。但し工業上の採算が取れないやうな發明ならば御免を蒙ると前以てことわつて置く。

◇ ◇ ◇

舗装してない地方道路の砂埃が、高く舞ひ上るのも、路面が乾燥する夏季が、一番甚だしい。まして、得てして白い服装が多くなるから一層この憾を深くするわけである。汗と、脂と、埃で、着物も、身體もクタク／＼にされるのは、夏の旅の興味を甚だしく殺ぐ。或る場合には、これがあるために、夏の旅を思ひ止る場合さえある。ドライブ好きである外國人に、東京から、日光や、中禪寺湖などへ、何故ドライブして行かないのかと訊ねたら、あの埃ではとても我慢が出来ぬと言つたとか。癪にさわるが、本とうの事だ。

外國人よりも綺麗好きな日本人は勿論我慢出来ないのだが、そこまで、まだ手がまわり兼ねてゐたのである。

路傍の草木の葉が、白埃を一杯にかぶつて、その間からいぢけた花が咲いてゐるのを見ると、非情の草木とは言え氣の毒になる。東京の道路は、舗装が大體行き亘つたため街路樹の葉の白埃はあまり見られなくなつたが、今では地方の自動車が増したため、年一年その路傍の草木の痛められるのがひどくなつた。

地方道路の舗装の必要が、目を逐て切實に叫ばれるやうになつた。その舗装の施工箇所又は路線の順位は、路傍の草木の葉の白くなつてゐる所から始めるべしと言ふことにしたら良からう。戯言では無い、葉が白くなつてゐることは、その道路の交通量を計る一つのメーターだとも言えるだらうぢやありませんか。

◇ ◇ ◇

交通が目まぐるしく繁激になつて、家の前に涼臺を出して、團扇片手に、浴衣、水髪の姉さんに、花火を點けて貰

つて楽しむやうな、風流(?)な遊び場所が、殆んど無くなつて、子供の夏の世界は、山か海か、郊外かに求める外ない。安易な涼みが出来ないのが氣の毒である。近頃は猫も杓子も、海へ山へと行きたがる。流行り物を逐ふ氣持もあるだらうが、家に近く、涼を納れる場所が無いから、餘儀なく出かけることにもなる。都會は子供の遊び場に非ずと、アツサリ片附けられたら、花も實もない。小公園だとか、緑地だとか言ふことがやかましく言はれるのも、有難い事だが、更に一步進んで(?)自宅の前で、も少し氣樂に子供が遊べるやうに、良い考えは無いもの知ら。暑苦しい都會の夏の夜の、寝る前の一時を、最も手近に、納涼するためには、自宅の前の街路を拜借しても、あまりやましく言はないだけの、雅量を警察官に望み、同時に住宅地帯の街路を作る時には、それ位の餘裕幅員を取つて貰つたらと。慾の深い事だらうが、希望したい。涼むのなら庭で涼んだら良からうとも言へさうだが。何うもだんノ世智辛い當世では家の内に庭などは、御大家で無くては望

めないし、それに、團扇で、バタ／＼やりながら向ふ三軒
 兩隣の涼臺と世間話を交しながらの納涼と、内庭で家内だ
 けでの納涼とは、味も實も大分相違がある。

但し、此の涼み臺への登場人物に注文がある。それは、
 アツパツバ服を着た女は御免を蒙りたい。女の着物の柄と
 か地とか、染色とかの流行は、關西が、發祥地だと聞き、
 感心してゐたが、このアツパツバも關西から流行して來た
 との話を聞いて、悲觀した。此れだけはいくらヒイキ目に
 見ても嬉しくない、日本髪で、あの服でそれに白足袋で下
 駄穿きと來ると、まるで、漫畫の種である。何れ程涼しい
 のか、何れ程簡易なのか知らないが、あの恰好で、シャッ
 ヤリ出られると、切角の涼しさうな涼臺風景もぶち毀して
 ある。近頃の婦人洋装は、その體格が良くなつた事と、馴
 れたことによつて、大變恰好が良くなつて來て、流行か知
 れないが、肩の付け根から露出してゐてもあんまり不均合
 でもなくなつた、肩の付け根から直に、むき出すことに若
 干の遠慮があつてか裝飾の關係か知らないが、肩の所だけ

チイ／＼パツバの雀の羽根のやうな、小さい羽根がピラビ
 ラ附いてゐるのがある、可笑しいとは思ふが、無恰好だと
 は思はない。が、あのアツパツバと來ると、似て非なる存
 在で、情ないこと夥しい、洋装がして見たいため、あの服
 で、せめてもの心やりとしてゐるのなら憐愍だが、涼しく
 ても良いからと言ふのならば、女のたしなみを捨て申し候
 とことわつてから街へ着て出て欲しい。餘計なお世話だ
 と、唇をビイーと出されさうだが、街路は、お互に氣持よ
 く通れるやうに心掛けようぢやありませんか。

◇ ◇ ◇

夏の夜の街頭風景から除けられないものに、夜店があ
 る。蟲賣り、金魚賣り、走馬燈、風鈴、花火、水遊びや砂
 遊びの玩具、しのぶ賣り等、團扇片手に、涼みがてら見て
 まわつても氣持が良かつたが、今では「夜店物」と言ふ熟
 語が出来た程、夜店が、簡易マーケットになつて、縁日の
 夜店を楽しみに待つこともいなくなつた。此うなると涼
 しどころか、湯上りの素足に土ほこりを灰色に浴せて、

夏向きの物賣りを、マーケツト物賣りの中から探し出すのに大汗をかく。もう少しゆとりのある夜店気分が味ひたいものだと思ふ。

銀座の夜店など夏の夜汗ビツシヨリになつて歩いてゐるのは、納涼の目的ぢやなくて、一種のデモンストレーシヨンだ、肩轂相摩して揉み合ひへし合ひ、御苦勞なことだ。それに、御丁寧にモボとモガが、腕を組んでなどと來ると、御本人たちも熱いことだらうが、はたの見る目もアツイデス。それに、洋装してゐるからにはと、細からざる足をハイヒールのきやしやな靴に無理に押し込んで、靴の踵はグラ附く、曲つたまゝで摩滅する、サテは、かゝとが後へ、兎の尻尾のやうに押し出されたなど、凡そ悲惨な形のものを書いて、身體はシャツキリ正面を切りたし、足の安定は悪し、山崎街道の與市兵衛のやうな恰好で歩いてゐる御婦人を見ると、何を好んで？と言ひたくなる。歩くことそれだけに、汗ビツシヨリだらうと拜察する。

夜店を思ひ出したが、新潟で、夜店を見たが、あそこで

は、歩道から車道の方へ向けて店を擴げてゐる。それだけに、車馬の通行も禁じてゐないので、買ひ手は危険にさらされながら買物をしなければならぬ、買ひづらい事だらう。歩道が狭いからか知らないが、考えたら良からう。それから、青物野菜など、賣る者は、何うせ近在から賣りに來てゐるらしい様子をしてゐたが、一様に夜だと言ふに、菅笠をかぶつたまゝで座り込んでゐる、晝間から商賣をやつてゐるのか聞いても見なかつたが、多分夜露を防ぐのだらうと洒落て笑つた。

◇ ◇ ◇

暑さが激敷なるに正比例して自動車や電車、さては自轉車の交通事故が多くなる。暑さは暑し、日中馳驅するこれ等の車の運轉者も、暑氣で精根を疲れさせるから一概に無理とは言へないだらうが、目のまわる様な商戰、政戰に飛びまはらせられる自動車の運轉手君には、同情せざるを得ない。近頃の流し圓タクの運轉手は、ツボンをまくし上げて、半ツボンのやうな恰好をしてゐるのが多い、エンヂン

の熱氣に下から煽られ、上から百度近い炎暑に照りつけられるのだから、堪えられないさうだ。暑中は日盛りの流しをしてゐても、あまりお客が無いだらうと思ふと、あれでなか／＼さうでなく、夜も、晝も、あまり變らない位の拾ひ客があると云ふ話、も一つ面白いのは、運轉手にも、夜流しの得手なのと、晝流しでなければ出来ないのとあるさうだ。十人十色で、各々得手があり不得手があるのは勿論で、數學が得手、文學が得手と、夫れ／＼天稟があるが、同じ運轉手でも、流し圓タクの得手不得手が、夜晝によつて違ふとまでは思はなかつた。鰻の生き膽は夜盲症の妙薬とか言ふから、夜流し圓タクの得手な運轉手は或ひは鰻の好きな連中ばかりかも知れない。

圓タクと言へば近頃は、二三流の所謂實用車の體裁も良くなつて、フォード、シボレーの新車など、なか／＼スマートな恰好をしてゐて、古い車には乗り手が無くなつたので、自然、無恰好な年代ものの車はあまり見かけなくなつたが「田舎へ行くと、タクシー車には随分ヒドイがある。

バケツ持參で運轉して行つて、水の漏るラヂエーターに、時々路傍の溝から水を補給して行く。氣息奄々として水を飲み／＼進む自動車なんかに乗ると、新しい角度からの旅愁を覺える。此う言ふ車を運轉してゐる運轉手は、あそこどあそこに、足場の良い水波み場があると、チャンと心得てゐるから、藝は道に良つて賢いものだ、つく／＼感心する。此の間東北のある縣内で、峠道にかゝる手前の路傍の水路に、チャンとバケツが用意してある所へさしかかつたら運轉手が、早速そこで、水を補給して行つた。黙つて使つても良いのかと聞いたら、自動車の水の補給のために常置してあるバケツだと答へた。

自轉車旅行者への便宜のため地方の青年團や在郷軍人團等が、路傍に空氣入れポンプを備へつけて置く奉仕事業は、今でもやつてゐるだらうが、自動車旅行者が殖えて來ると、此うしたバケツなどの備置きが、喜ばれることになる。田舎の人は親切だから、未知の家へ飛び込んで、バケツをお借り申しますと言へば快よく貸して呉れる

が、不在であつたり、或ひは人家のない山道だつたりすると、そのよすがも無い。自動車は、バケツ持參で旅をする。自不由を除くために、適當な所に、バケツを備へ附けてやることも、社會奉仕の一つである。一臂の勞を望む。

◇ ◇ ◇

ところてん、焼酎、あり合せ酒肴に、馬の飼糧などを鬻ぐ街道の立場茶屋も、夏の點景の一つであらねばならぬ。

運搬距離と、輸送物資の種類如何によつて、貨物自動車と對立して交通機關として猶將來に短かからざる生命を持つであらうと考へられてゐる荷牛馬車が動いてゐる限り、この立場茶屋の、なりはいも立たうと言ふもの。そこでは馬方が休み、車も荷物も休む、馬方は、暑氣拂ひの焼酎の一盞を傾ければ、馬も樹陰で、かいばにありつける。

が、往々にして、いや多くの場合、馬方殿は茶店の中で、肌脱ぎで休んでも居ようが、馬は、車に附けたなりに、路上で休まされる。片寄せて置くつもりだらうが、蛇や蠅に責められ、デリ／＼照りつけられる馬は、苦しくなつて藻

掻く、車が動く、道路の中央まで車の後が出つ張つて来る。さうなると、休んでゐるのは御自由だが、殆んど迷惑千萬な交通妨害をしてゐる。人力車の挽子が、一時自動車を眼の敵のやうにしてゐたと同様な氣持からすれば、馬方さんにも、トラツクに、うらみがあるかも知れない。が、世は進む、便利で、早くて安い物は畢竟勝を制する。自分達の休養のために、他の交通の妨害をされては、他の者の迷惑ばかりでなく、大きく言へば國家的損害を與えてゐることになる。馬方さんにその點を心着いて貰ひたいと注文すると同時に、立場茶屋の商賣をするには、道路外に、車馬の駐め場所を設備しなければいけないことにして貰ひたいと思ふ。これは、自動車の立場茶屋であるガソリンスタンドが、道路外に設備すべきであるのと全然同趣旨であつて、しかも閑却されてゐる問題である。交通警察の見地よりして猛省を望む。

◇ ◇ ◇

近頃は學生の自動車旅行熱が、航空熱と共に盛んになつ

て、今年の夏など、東京の二三の大學生が、それ／＼自動車旅行をやつてゐる。スポーツとしても剛健な、そして新しい行き方で、旅行に依り世間の實際に觸れ、見聞を廣め、暢びやかな人間を造るのには、大變結構なことと思ふ。或る大學の自動車旅行隊などは、通過道路の良否の批評を新聞に發表したりしてゐる、一面からすれば、小賢いしと言へるかも知れないが、純真な彼等の眼に映じたまゝの道路の狀況の報告であり、お世辭も壓迫もない批評であるから取て以て參考とするに足るものが少くない。

自動車の運轉手は商賣柄、道路の良否に異常な關心を持つてゐるのは尤もだが、近頃は地方の乗合自動車や汽車の中などで、乗客同志の間で、何縣の道路は良いが、何縣の道路は悪いなどの會話を聞く事が度々ある。道路の良否が話題に上るのが多くなつただけ一般人の道路の改良についての關心が深くなつたもので、我等甚だ心強い次第である。前言つた學生自動車隊の隊員諸君などが、實社會に立つて働く頃には、もつと多數の隊員が出来るであらうし、

道路の狀況も亦今年格附けたものとは格別の改良が出来てゐて、愉快なドライブを、スポーツとして満足に味ひ得るであらう。

暑苦しい話に落ち入り易いから此の邊で措筆して暑氣止めにする。

水 撒 き

黒埃は昔から江戸の名物である。最近東京の道路は大部分舗装され黄塵黒埃は非常に減少した様だが、まだ／＼この黄塵黒埃は萬丈までもバス・トラック・タクシーのため飛散して大江戸の名残りを誇(？)つてゐる。佛蘭西巴里では朝三時頃最も人通りのない刻限に街路を水で洗つて、雑巾をかけ黒埃を取除いて街路の美觀維持に大童の由だ。然るに日本の東京では撒水自動車で一吋許り水を撒いて、水を混和し泥と化し、黒埃を固定させ、當座だけ黒埃の空中に飛散するのを防いでゐる。これでは駄目だ。巴里とまで行かなくても赤字の國日本でも今少し何んとかならないものか。こんな臭い物に蓋をする様な間に合せをしないで披本塞源的にやつたら如何だ。

(M生)